大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

Virginia Woolf の作品分析：病の諸相をめぐって

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-08-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 柴田, 清恵
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011278

投稿論文

Virginia Woolf の作品分析――病の諸相をめぐって

柴 田 清 恵

1．問　　題

英国 London 生まれの作家 Virginia Woolf（1882 － 1941）は、若年のときから幾度も mental breakdown に見舞われながらも、書きものが可能なときには小説や論説をはじめとして、多くの手紙や日記や回想記を創作し続けた女性であった。13 歳のときの彼女の母親の死後すぐに大きな breakdown があったと考えられており、さらに 15 歳、22 歳、 28 歳、30 歳、31 歳、33 歳、39 歳のときに、程度の差はあるが、比較的長く不調の時期が見られる（Bell, Q. 1972）。それ以後もほぼ毎年のように、頭痛や頻脈、焦燥感などで、創作活動などがままならない時期がある。そして本人の遺書によれば、再びの mental breakdown の兆候に「あの恐ろしい経験にもう一度耐えることができない気がします（Bell, Q. 1972）」と述べ、59 歳時、入水自殺を遂げてしまう。

Virginia [1] の日記や伝記が出版されて以来、彼女の病については躁うつ病や非定型精神病 [2] の可能性が論じられている。実際、伝記や日記に現われる症状と呼べるものは実に多彩である。さまざまな資料や小説中の表現から Virginia という人物のことを考えると、神谷（1981）の非定型精神病説はかなり有力なのではないかと思われる。神谷（1981）は「病の経過とその一般的構造はまちがいなくこれが躁うつ病であることを示す。しかしウルフの人格と病の中に精神分裂病質的及び精神分裂病的[3]な要素があるのを見逃すことはできない。……事実に忠実であろうとするならば、ここには『循環的』な要素と精神分裂病的な要素の双方があることをみとめなければならない。つまりこの病は『非定型性精神病』または schizo-affective psychosis（分裂－情動精神病）のグループに属すると考えられる」という。神谷（1981）は詳しい Virginia の症状の解析を以下のように述べる。

症状としては躁うつ病に典型的な罪業念慮、食欲減退ないし拒食、多弁多動のほかに緊張病性昏迷、罪業妄想、夢幻様状態、支離滅裂、恍惚状態、意識混濁など、分裂病やてんかんに見られる症状を現したこともある。前駆症状はウルフが最もよく自覚していたところで頭痛、思考の奔逸、不眠、頻脈、憂うつや絶望の感情が主として日記に記されている。病気がひどくなり、躁状態からそれ以下になってくると姉やレナド〈Virginia の夫〉[4] など、最も愛する者に対して敵意を燃やし、皆が陰謀を企てて自分を迫害すると思い込むなど、みな臨床的にこの種の患者によくみられるところである。（神谷 1981）

ただ、神谷は上記考察を行った際には、紙面の制約のためか、各症状をこれ以上子細には論じていない。

また「概して何もしないで過ごすことを彼女は非常につらいことに思った（Bell, Q. 1972）」と言われるVirginiaは、病でない間はたいへん精力的に書きものや読書をしていた。これらの状態像から、Virginiaが病の時期と比較的生産的な仕事を果たすことのできる時期をかわるがわる過ごしており、人格的に顕著な欠陥を残さず回復する様子が看取できる。これは非定型精神病が多く位相性、周期性の経過をとり、予後が比較的良好であることに合致すると考えられる。とはいえ、以上の考察の大部分はVirginiaが病の状態にあったであろうことを外から観察した事柄である。そして神谷（1981）も指摘するように、Virginiaの作品の中には本人の内的体験からの病の描写が多く行われており、それらは作家としての活動が可能な時期に多大な労力をさいて表現されたものでもある。

そこで、本稿においては、病の当事者の目線からの希有な「語り」ともいえる、Virginiaの作品世界に表われている彼女の病の諸相、主として症状群がよく表わされているとおぼしき数作品を取り上げて考察を加えた後、藤縄（1981）による非定型精神病に関する論考に基づき、それらを整理することを試みる。そして、これらの考察を行うことにより、神谷（1981）の論じたVirginiaの病誌に関し、本人の「語り」からさらに少しでも明らかにすることを本稿の目的とする。

2．Virginiaの作品世界

ここからはVirginiaの小説を数作とりあげ、主に彼女の病の諸相が表わされていると思われる箇所を中心として考察を加えていく。

2－1　*The Voyage Out*

Virginiaが初めて書籍の形で小説を出版した*The Voyage Out*（Woolf, V. 1915）は、彼女が25歳ごろに書き始められたもので、33歳のときに出版され、たいへん自伝的だと言われている（Spater, G. & Parsons, I. 1977、神谷 1981）ものである。主人公Rachelは英国のヴィクトリア時代、有産階級の家庭に育った24歳の女性である。母親は11歳時に死亡しており、父親の持ち船で、おじ夫婦、父親とともに南米へむけて船旅をし、新しい生活を始める。そこで婚約する青年とも出会うが、物語終盤でRachelは熱病にかかり、息をひきとる。一般に初めての作品にはその作家の後々の人生が暗示される、と言われることがあるが、本作品の主人公も、病死というVirginiaとは違った死因ではあるものの、他界する。

以下、主人公Rachelの離人症様の体験、および終盤で彼女が病に倒れる場面を取り上げ、考察

を行う。

(1) エピソード的離人症状

物語の中盤で、主人公 Rachel は以下のような体験をする。

おばの家に落ち着いた後、暑い朝に読書していた主人公は、自分の心が時計のぜんまいで、その時計の音に外界の音が加わったように感じる。「それはすべてとても現実的で、とても大きく、とても非個人的（impersonal）で、しばらくすると、彼女自身が存在しているという意識を取り戻そうとするように、彼女は椅子の肘かけのところで、ひとさし指を上げたり下げたりし始めた。次に彼女は、朝、世界の中央で、アームチェアに座っていることの、いうにいわれぬ奇妙さに圧倒された。家の中で動いている人たち、もの（things）をこの場所からあちらへと動かしている人たちは誰だろう。そして人生（life）、それは何なのだろう。それは、部屋の家具は残るけれどもいつかは彼女も消えていくように、表面を通り過ぎて消えていく光にすぎない。彼女の解体（her dissolution）は徹底的になっていき、もう指を動かすことができず、完全にじっとすわり、同じところをみつめ、聴いた。それはより奇妙さを増してきた。彼女はものが存在するということの畏怖の念（awe）に圧倒された…彼女は上げることのできる指があることも忘れた…存在するものたちは巨大で、荒涼としていて…彼女は長い長い時間、これらの巨大な物質のかたまり、万物の沈黙（the universal silence）の中で規則的に続いている時計の音を意識し続けた。」（Woolf, V. 1915）〈私訳〉

さらに Rachel はある日、昼食の１時間ほど前に散歩にでかけた並木のある小道で、次のような「光景」に足を止める。

主人公はその前夜にダンスパーティへ出かけた感慨がまださめないためか、周囲をよく見もせず歩いていた。パーティの記憶が彼女の脳裏にどっと押し寄せ、生き生きと心に浮んだ。「そんな風に、彼女は道を見失うまで歩いたかもしれなかったが、とある木がそれを妨げた。その木は別に彼女の行く道をふさいでるわけではなかったが、まるでその木の枝が彼女の顔をうちでもしたかのように効果的に彼女を止めた。それは普通の木だったが、彼女にとってはそれはあまりにも奇妙に思えて（to her it appeared so strange）、まるで世界中にただ一本の木であるかのようだった。暗い色は真ん中の幹で、木の枝があちこちに広がり、その間の光は、まるでそれ自体が地面からその瞬間に生えたものであるかのように明瞭に、木の枝の間にギザギザした間隔を置いていた。一生続くかと思われるような、そして一生心に留めておける瞬間と思われるような光景を見た後、その木は普通の並木の中に再び沈んでいき、彼女はその木陰に座って、緑色の葉をつけた赤い花を摘むことができた。」（Woolf, V. 1915）〈私訳〉

以上のことに彼女が恐怖心を抱いたのか、恍惚感を覚えたのか、「奇妙さ」、「畏怖の念」、「奇妙

に思えて」といったことばだけからは即断できず、また可逆的なものでもあった。それに、いつもは見慣れたものが何かの拍子に異なる様相をおびて見えてくることは、いわゆる健康者にもあることである。ただ、上述の表現から考えられるのは、彼女が即自的な世界、すなわち他と無関係の、何をも媒介にしない「存在」による恐れに圧倒されている、という可能性である。このことをFedern, P.（1953）の自我境界の観点から考えてみる。

Federn, P.（1953）は「心の連続体」である自我のその経験を「自我感情」と名付け、その個々の時点での自我感情の周辺を自我境界とした。自我境界には外的なものと内的なものがある。外的な自我境界とは、自我所属的な内界を外界の刺激から分けているものであり、そして内的なほうは、前意識的に自我から排除され、動揺をもたらすような無意識からの欲動や記憶から内界を分けているものである。これらは自我備給によって強化確立され、自我と非自我との区別を明確にするとともに、自我には「内部精神性」を、非自我には「外部的現実性」を保証する。そしてものごとがあることや自分がいることに適度な現実性が感じられるには、その外的事象からの刺激が、十分に備給された外部自我境界を通過する必要がある。上述の主人公の体験では、自我境界の自我備給の減弱によって、外部的現実の事象に本質特徴の突出が起きている、と推察できるのである。これは知覚した対象への自己の人格感による裏づけを失った状態、つまり離人症状と考えられる。

とはいえ、この体験の後に、主人公は訪問者に気がついてすぐに席を立ったり、読書にもどったりすることができた。ゆえにこの体験はエピソード的離人症状と考えるのが妥当であろう。

(2) 安全感喪失と焦慮の問題

物語の佳境で、主人公Rachelは熱病にかかり、「幻覚・妄想に満ちたせん妄状態（神谷 1981）」に陥る。彼女の状態は、下記に見るように、独特の世界に捕まってしまい、時間の感覚も不確かになり、そこから逃れられないかのような印象である。

〈彼女は〉ときどきふつうの世界（the ordinary world）に戻ろうと努力したが、暑さと不快さが、自分の世界とふつうの世界との間に越えられない深淵（a gulf between her world and the ordinary world which she could not bridge）を開いたように思った。（Woolf, V. 1915）〈私訳〉

部屋の中の全てのもの（object）とベッドそれ自体、そして、各手足とそのいろいろな感覚のある彼女自身の身体（her own body with its various limbs and their different sensations）は、日々、ますます重要になった。彼女は完全に切り離され（cut off）、それ以外の世界と通じることができず、まったく孤立し、共にあるのは彼女の肉体だけだった（isolated alone with her body）。……朝は終わることなく、また、白昼から真夜中へがほんの2、3分のこともあった。……Rachelはある夜、真夜中の12時で終わら

ず、13 時、14 時、そして 20 時と続き、さらに 30 時、40 時と続く限り無い夜の中に自分自身がいることに目覚めて気づいた。(Woolf, V. 1915)〈私訳〉

また、次に引用する彼女の状態は、夢であるのか幻覚であるのか定かではないが、「悪夢的」と呼んで差し支えないものであろう。

六日間というもの、彼女は外界を忘れていた。目前にたえず過ぎ行く熱い、赤い、速い光景にすべての注意を払わなければならなかったからである。これらの光景に注目し、その意味をつかむことが極めて重要だということはわかっていたが、それを全部説明してくれる何かがあるのに、それを聴いたり見たりするのに、ほんのちょっとのところで間に合わなかった。……〈六日の間の〉四日目の夜には、とつぜん〈おばの〉ヘレンの顔があの光景とごっちゃに見えてきて、……ヘレンはほかの人たちと同じように早口でわけのわからないことをしゃべり出した。その光景はみな何かの陰謀、冒険、逃避に関係していた。彼らのしていたことは、その性質がたえず変っていたのにもかかわらず、その背後にいつも何かの理由があり、それをつきとめる義務が自分にあった。

人びとは今、木々や野性の人びとともにいるかと思うと、次には海の上におり、さらにはいつの間にか高い塔の上にいた。いま跳びはねているかと思うと、もう飛んでいるという有様であった。今すぐ危機が起ころうとしているとき、きまって何かが彼女の脳の中ですべり落ちてしまい、すべての努力を始めからやり直さなくてはならなくなる始末。息がつまりそうに暑い。ついにいろいろな顔は去って行き、彼女は粘りこい、深い湖の中に落ち、その液体はやがて彼女の頭の上に満ちた。何も見えず、何も聞こえず、ただ頭の上でうねっている海のかすかな音だけが響いていた。彼女をいじめ苛むものたちはみな彼女を死んだものと思っていたが、そうではなく、自分は海の底に丸まって寝ていたのだ。(Woolf, V. 1915)〈訳は神谷 (1981) による〉

上記、主人公の内的世界の叙述は、中井 (1974) が「人がその中で生の戦略を展開する空間」として提示した、「距離空間」と「信号空間」の問題に似通った点があると思われる。「距離空間」とは、一般的に理解されやすいところの、近いもの、馴染みのものほど強い意味を持つ空間である。空間内の対象物は自立的なものとして把握され得るし、その意味もすぐれて直示的である。他方、「信号空間」は、遠いもの、未知のもの、さだかならぬものほど強い意味をもつ。把握はしばしば相貌的で、暗示的意味が優位となる。これはいわゆる健康者にも持ち得る空間で、たとえば知らない街で地図もなしに鉄道駅を探しあてなければならないときに、われわれは道ゆく人が歩く方向やその服装、道を教えてもらえそうな人かどうかを示すかすかな徴候などに注意を向ける。そのときにはもはや出会うものをそれ自体の直示性において捉えない。そして我々は距離空間の前線あるいは辺縁に出現する未知の物をたえず距離空間にくりこんでいくが、それは信号空間においてなされている、とされる。(中井 1974)

さて、前述の悪夢的状況の中で、主人公が知覚しているらしき「目前にたえず過ぎ行く熱い、赤い、速い光景」は「信号空間」の中で強い意味をもつ、未知でさだかならぬものが勝手に飛び回っているような状況であると考えられ、「何か」ひとつ掴むことができれば「全部説明してくれる」はずなのに、それが能わない。次に「信号性、兆候性は独り歩きし、むしろ『兆候空間』の名に相応しいものとなり、さらに兆候性が氾濫し象徴性や意味のハロ（縁暈）が前景に出て空間は悪夢化する。(中井 1974)」それゆえに見えた光景は「みな何かの陰謀、冒険、逃避に関係して」おり、増大していく不安を解消するためには「何かの理由があり、それをつきとめる義務が自分にあった」のではあるまいか。

以上の「距離空間」と「信号空間」の問題は、中井（1974）が論じた分裂病の発病過程の「焦慮の時期」、緊張が高まって焦り、その焦りが行動ではもはや解消できないような状態に見られるものとして論じられている。中井（1975）による Sullivan, H. S. の分裂病論の紹介と論考を参照すれば、分裂病の患者の感じる「あせり＝促し」――両方とも‘urgency’である――の感覚は、宇宙大の安全保障感の希求であり、「この『あせり＝促し』の意識の辺縁にはつねに恐怖〈テラー〉がちらついている」という（中井 1975)。主人公が「今すぐ危機が起ころうとしている」という恐怖を感じ、全部を説明してくれる「何か」、背後にある「何か」の理由などを必死に得ようと焦っているのは、安全保障感を取り戻すためであり、そこでまるで解けるわけのない問題を解かされているかのように苦悶していると考えられるのである。

次いで主人公は、悪夢のような状況から逃れて嵐が過ぎ去るのを待つかのように、「海の底に丸まって寝ていた」。これは緊張病様の昏迷とも考えられる。死んだと思われていたが、実はそうではなかった、という記述は、外から見ると何も見えず聞こえていないように思える昏迷状態の人が、実際にはぜんぶ見えて聞こえており、記憶も残ることを思わせる。

この主人公の「世界」について、神谷（1981）は「なまなましい」と感想を述べている。そして「経験した『病気』の中での状態の一部がここに反映しているにちがいない」と考察する。神谷（1981）によれば Virginia は非定型精神病と考えられ、本作 *The Voyage Out* を書いたときには、すでに13歳時、15歳時、22歳時に大きな breakdown を経験していた。その22歳時の breakdown は、父親の死亡後におきたものだったが、そこで Virginia は中井（1974）が論じた分裂病の発病過程をたどったと思われる節がある。以下は Bell, Q（1972）の伝記による記述である。

頭痛がしたり、急に興奮して動悸がしたり、自分の精神が何かひどくおかしいという意識がだんだん強くなったということは、かなり推測できる……五月に、彼女は何か仕事をしたい、何か大きくてしっかりしていて、彼女の落ち着かぬ考えを集中させるようなものにとりかかりたいという激しい気持になった。そして彼らがロンドンに帰った次の日に、エマ・ヴォーン〈母方の従姉〉が手紙を借りに来た時、

ヴァージニアは彼女が何を言い、何をしているのかほとんど分からなかった。

それから病気で倒れて、彼女はしばらく悪夢の世界に入り、数ヶ月前からの兆候がひどく激しくなった。彼女のヴァネッサ〈実姉〉に対する不信、父に対する悲しみが狂気じみたものになり、彼女の看護婦は……悪鬼になった。彼女に愚かな行為をしきりに促す声が聞こえた。(Bell, Q. 1972)

文中の「何か仕事をしたい、何か大きくてしっかりしていて、彼女の落ち着かぬ考えを集中させるようなものにとりかかりたいという激しい気持」、またその後に悪夢を見るという状態は、中井（1974）による分裂病発病の過程論の、いわゆる「一念発起」して何ごとかをなそうとする「無理の時期」から、緊張が高まり悪夢を見るようになる「焦慮の時期」に相似している。Virginia が分裂病の発病過程を経験していたのであったなら、先に述べたような「あせり＝促し」および極大の安全感の喪失状態を解消しようと苦悶する様子の記述ができても不思議ではないと考えられる。

以上、作品中における主人公の体験や症状を、エピソード的離人症状、安全感喪失と焦慮の問題の２点について考察してきた。ひき続き、分裂病様の状態などを経験している青年が登場する『ダロウェイ夫人』をとりあげ、考察していく。

２－２　『ダロウェイ夫人（*Mrs. Dalloway*）』

『ダロウェイ夫人（Woolf, V. 1925）』は主な登場人物の二人、クラリッサ・ダロウェイと精神障害を持つとおぼしき男性セプティマスの内的独白の流れが基本になっている小説である。主人公の一人、セプティマスは離人症状などの状態に悩まされており、物語の終盤、投身自殺を遂げてしまう。そのセプティマスについて神谷（1981）は「彼を描写する章の中にはおどろくほど多くの『精神分裂病的』症状があまりにも生まなましく描かれているので、これはウルフ自身の経験をそのまま書きうつしたものとしか信じられない」と述べる。そして Virginia 自身、本小説を執筆していた時期の日記に「私は自分についてのエッセーを書いているのか（AWD [5]；19 Jun. 1923)」、また「自分ができるかぎり事実に密着して書いているのに気づく……私は過去を必要に応じて分割払いの方法で語る（AWD; 15 Oct. 1923)」という書き込みをしており、登場人物には Virginia 自身のことも表現されていると考えられる。

多様な経験を独白するセプティマスだが、ここでは主として離人症状および夢幻様状態と思われる内的体験の独白をとりあげ、考察を加えていく。

(1)　セプティマスの「罪」と離人症状

作品中、セプティマスは主として過去をふり返る形で、彼自身の離人症的な体験を語る。以下

に関連する部分を引用し、要約する。

セプティマスは、物語の展開するある日の数年前、ヨーロッパにおける大戦が休戦になったとき、イタリアにいた。そのある夜、「突然の恐怖――なにも感じられないという恐怖に襲われた」。それ以前に彼は軍隊生活において「エヴァンズという名の将校の注目を、というより愛情を得」ており、「ふたりはいつも一緒」であったのだが、「そのエヴァンズが、休戦の直前にイタリアで戦死したとき、セプティマスはまったく動揺の色を見せず、これで友情が終わったと落ちこむこともなく、ほとんどなにも感じなくて、平静でいられる自分を喜んだ」という。休戦後の彼はときどき「突然の雷鳴のごとき恐怖に襲われた……なにも感じられない。イタリア人の娘たちがすわって帽子をつくっている部屋のドアをあけると、その姿は見えるし、その物音は聞こえる。……鋏がテーブルの上でちょきちょき音を立てている。だがなにかが変なのだ。感じることができないのだ。」さらに「ぼくには味覚がない。感覚がない。喫茶店のテーブルとおしゃべりなウェイターのあいだで、彼はあのぞっとするような恐怖に襲われた――ものが感じられないという恐怖に」と独白する。(Woolf, V. 1925)

これらは離人症者の「『嬉しくも悲しくも何ともない。自分の感情が全く消失してしまった』といういわゆる『感情喪失感』」の訴え（村上 1952）および、「知覚対象が平生とはちがって非常に疎遠な感じを伴う」、「景色もぼんやりし、立体感がなく……何を見ても生々した感じがない」という知覚の疎遠感（村上 1952）のおきている状態と考えられる。しかし彼は「ものが感じられない」と嘆くかたわら、次のようにも独白する。

弁解の余地はない。ものが感じられないというこの罪以外には問題はないということだから。そして人間性（human nature）はその罪ゆえにぼくに死刑を宣告した。エヴァンズが戦死したとき、ぼくは平然としていた。あれは最悪だった。だがその他のあらゆる罪悪も、ぼくが夜中に目をさますと、ベッドの手すりごしに頭をもたげ、非難の指を振り、退廃を自覚しひれ伏しているぼくの肉体を、嘲笑し、冷笑する。お前は愛してもいないのに妻と結婚し、妻に嘘をつき、誘惑し……そんな卑劣漢にたいして人間性がくだす評決は死なのだ……。(Woolf, V. 1925)

その後、医師の診察室で問診を受けながら、セプティマスは「ぼくは忌まわしい罪を犯し、そのために人間性によって死を宣告された」と考え、「ぼくは……罪を犯しました」と医師に告げる。また彼は妻がやせてしまってゆるくなった結婚指輪をはずしているのを見たり、近所の子どもを送って行くために彼女が部屋から離れる際、「ひとりぼっちだ」、「これがミラノで宣告された宿命だったんだ。……永久にひとりぼっちになる宿命」と思う（Woolf, V. 1925）など、疎外感を覚える。彼は離人症状に恐怖するだけでなく、自己非難をくり返しており、またこれらのことから、根底に抑うつ気分のあることがうかがわれるのである。

ところで、小説の中でセプティマスは以下のような体験をする。

セプティマスは公園のベンチで隣にすわっている妻が、飛行機が空に煙で描く広告文字を「K、R」と読んでいくのを「豊かなオルガンのような深く柔らかな声で『ケイ、アール』と言うのを聞いた。しかしその声にはきりぎりすの鳴き声のようながさつきがふくまれていて、それが彼の脊髄を心地よくこすり、大脳のなかに音の波動を送りこんだ。そしてその波動は大脳を大きく震動させ、くだけた。」さらに「人間の声は樹木を、自由に動くことのできる生き物へ変えることができるのだ」と思い、そこで妻が彼の膝を押さえてくれなければ「葉のすべてが光輝を帯びて、青い色から波の緑色までたえず濃淡を変え、たえず上下に揺れている楡の木々の興奮は、彼を狂わせたかもしれなかった」、「だがぼくは狂ったりするものか。目を閉じて、もうなにも見るまい」と考える。(Woolf, V. 1925)

セプティマスは聞えてくる妻の声と、眼前の揺れている木という風景とを関連づけて、木が自由に動きだしたと考えている。このことに関連すると思われる、中井 (1974) による「距離空間」、「信号空間」、「兆候空間」の問題については *The Voyage Out* の一節において紹介したが、ここでもセプティマスにとっては「声」がなにごとか象徴性をおび、意味的に伴示優位となり、そして光に輝きながら揺れる木の信号性、兆候性が独り歩きし、空間は「木が自由に動き出す」ほどに悪夢化していると言えよう。しかしながら、セプティマスには離人症状があり、「離人症者の苦渋はまさに『信号空間』の欠落、すなわち世界の兆候性の消失である」こと、「離人症は……『信号空間』の“スイッチを切る”ことによって保護的効果を果たす（中井 1974)」のであることを考えあわせると、セプティマスの離人症状は「彼を狂わせたかもしれなかった」というところから保護していたとも考えられるのである。

そして離人症状の果たす「保護的効果」が失われてしまえば、物語の時点で既にセプティマスに現れているような、壁からいろいろな顔が出てきて自分を嘲笑し悪態をつく、全世界が「われわれのために自殺しろ」と叫ぶ、ついたてのあたりで手が何本もこちらを指差しているのが見える、植物の中に老婆の顔を見る、飛行機雲を自分への合図だと思う (Woolf, V. 1925)、といった幻聴、幻視、妄想が起きるということになろう。また、さらにセプティマスは、彼に特徴的であると思われる夢幻様状態を体験する。次にその部分をとりあげ、考察を加える。

(2) 夢幻様状態

既述のように、恐怖を伴う体験を何度か作品中で独白するセプティマスは、ときにそこから転じて次のような叙述をすることがある。以下は公園のベンチに坐ったままのセプティマスの想念である。

人間は木を伐ってはならない。そこには神がいらっしゃる。……世界を変革せよ。憎悪から殺すものはいない。それを周知せよ……彼は待った。耳をそばだてた。正面の柵にとまっている雀が、四度か五度、セプティマス、セプティマスとさえずり、それからひとつひとつの音を引きのばしながら、元気のいい鋭い声で、犯罪は存在しないとギリシア語でうたう。そしてそれにもう一羽の雀が加わって二羽で、死者が渡る忘却の川の向こう岸にある生命の草地の木立から、長く引きのばした鋭い声で、死は存在しないとギリシア語で歌う。(Woolf, V. 1925)

グレーの服を着た男が実際にこちらに歩いてくる。エヴァンズだ！　だが体に泥がついていない。傷跡もない。変わっていない。全世界に告げなければ、とセプティマスは片手をあげながら叫んだ(グレーのスーツを着た死者が近づいてくる)。片手をあげるそのかっこうは、長い歳月のあいだ砂漠でただひとり、両手を額に押しあて、両頬に絶望の皺を刻んで人類の運命を嘆きつづけてきた巨大な人影が、いま砂漠の果てに光を、灰黒色のおのれの姿を照らす広がりゆく光を見たかのようだった……背後には大勢の人間がひれ伏しているが、人類の運命を嘆き悲しむその巨大な人間であるぼくは、一瞬のあいだこの顔にすべての光をうけ……ぼくは後ろを振り向き、数秒後に、あとわずか数瞬ののちに、人びとに伝えよう、この救いを、この歓喜を、この驚くべき啓示を――(Woolf, V. 1925)

さて、藤縄(1981)は夢幻様状態に関してMayer - Grossの考えを紹介し、「願望充足的妄想体験を特徴とする恍惚状態および激しい幻覚が、夢幻様体験型の基礎にある……この状態では患者は多彩な小説的光景を経験しており、光景は次々と急激に転回しながら続いてゆく。つまり患者は地震、火山噴火、火事、洪水、凍氷、戦闘、砲撃、難破などの中を生き続けていると経験する……患者は積極的にこれらの出来事に参加し、犠牲者に同情し、自分自身の行為に責任感を抱く」という。たとえばある症例では「『ノアの箱舟』にいるような幻想が生じた……食堂の窓は瑠璃色に輝いてみえ、時間感覚は失われ、世界の終末を予言できるように思う」ことをあげている。また別の症例の女性は精神運動性興奮を伴う夢幻様状態となった際、「病舎の庭のベンチに腰をかけていると子犬が一匹やってきて、笑ったり踊ったり、小学校時代の歌を歌ったりする」、「昨夜死んだお祖母さんが、手を取ってどこかに引っぱってゆくのです。……本当です。だって本当に私がついてゆき、どこかのとても気持のわるい家の中にはいってゆくのです」という体験を語っている(藤縄 1981)。

セプティマスの、雀が自身を呼んでいる、エヴァンズが歩いてくる、等々の独白は妄想知覚や幻視等と考えられるのであるが、それに関連して派生する光景は多分に小説的であり、また何かの啓示を「人々に伝えよう」とする辺りは「犠牲者に同情し、自分自身の行為に責任感を抱く」という夢幻様状態の患者の特徴と類似している。おそらくセプティマスにとっては「特有な意識障害の状態をきたすとともに、意識内容、心的構造ともに、夢に連続した状態、つまり夢幻様状

態に至る」ことであったと考えられるのである。

考察してきた『ダロウェイ夫人』のセプティマスにも離人症状が表わされていることは既に述べたが、次にあげる小説『波』の登場人物にも、離人症状を持つ人の自己陳述を思わせる内的独白が表わされる。ひき続きその『波』の登場人物について考察を進める。

2－3 『波（*The Waves*）』

1931年に出版された『波（Woolf, V. 1931）』は、Virginiaが47歳から49歳ごろに書かれたもので、主たる登場人物の6人の内的独白だけが連綿と綴られていくというものである。この小説を執筆中の1930年10月に、Virginiaは友人の一人への手紙で、「病気になり、あらゆる悪夢や突飛なほど過敏な感覚に耐えた後、私は詩や物語、深遠な、霊感による文章（profound and to me inspired phrases）を一日中ベッドに横になりながら作るのが常だったので、そこでスケッチしたものが、今、理性の光によって、私が散文にまとめようとしているもののすべて」であり、「恢復したとき、私は自分の狂気に対して身震いするほどの恐れを抱いていた」[6]という（Woolf, V. 1989）。ここでは、おそらくVirginiaに「身震いするほどの恐れ」を抱かせたという状態が優れて表現されていると推測される、登場人物の一人、ロウダに焦点を当て、彼女の特異な体験と、そこから抽出され得る問題や症状をここでは考察していく。

ロウダについては神谷（1981）も、Virginiaが幼少期から感じてきたことや隠された面などをよく表わしている、と考えていた。ロウダは「人生はとても恐ろしい」と訴え、「頭すれすれのところで、大きな石臼のあわただしい音（the rush of the great grindstone）が聞こえる、それの惹き起こす風が唸り声を上げて顔に吹きつける（Woolf, V. 1931）」といった圧迫のようなものの表現からは、今にも破綻をきたしそうな状態が想像される。そしてロウダは物語終盤で自殺したとされるが、状況や方法などは明確に言及されていない。以下、彼女の内的独白をいくつかの観点からとりあげ、考察を加えていく。また、前述した手紙から、ロウダの体験はVirginia自身の体験でもある、と見なすことを断わっておく。

(1) ロウダの‘terror’

ロウダには、後述するような離人症者による自己陳述を思わせる体験や知覚が内的独白の表現の中に見受けられる。顕著なものは自己喪失感、身体意識的側面の離人症状、時間体験の障害、深淵と墜落のイメージの四つである。彼女はこれらの体験が始まるとき、「あの恐怖がはじまる（the terror is beginning）（Woolf, V. 1931）」と思う。

第一に、自己喪失感である。まず、以下にロウダの叙述を記す。

ガーデン・パーティで恥をかいたあとだった。……中庭に、死体のような、恐ろしい、灰色の水たまりがあった。……水たまりのところに来た。またげなかった。 あるべき自分というものがなくなった。(Identity failed me.) 人間は無だ、と思い、落ちた。(We are nothing, I said, and fell.) 羽のように吹き飛ばされ、トンネルを漂い落ちた。それから、とても慎重に足を出して渡った。石の壁に手をつけて。灰色の、死体のような水たまりのところを越えて、自分自身を身体の中に引き戻しながら、苦心の末に私は戻ってきた。(Woolf, V. 1931) 〈私訳〉

この「水たまり」に関わることとして、1939年、Virginiaが57歳のときに書きはじめた回想記の中に、彼女自身の似通った経験が記されている。

小道の水たまりの瞬間があった。そのときどういう理由かわからないが、あらゆるものがとつぜん実体をなくした(everything suddenly became unreal)のである。私は動けなくなった。水たまりを横切って足を踏み出せなかった。私は何かに触れようとした……世界全体が実体をなくしていた (the whole world became unreal)。(Woolf, V. 1976)

ロウダの「水たまり」の箇所は、おそらくはその経験からのものであろう。Virginiaのそれはどちらかというと外界との疎隔感と考えられるが、ロウダの独白では「自我の内的堅固さの喪失 (Federn, P. 1953)」がより顕著である。Federn, P. (1953) は自我意識や自己所属感の障害と、外界や内界の現実喪失感としての疎隔体験とを分けて考える。前者は「自我の解体の主観的体験」であり、「自我の中核がリビドーを失っている」状態、ひいては自我統一機能が減弱している状態であるのに対し、後者は「自我境界のみがリビドー成分を失っている」と述べる。ここでのロウダの体験は「自我の解体の主観的体験」と考えられ、identityをなくした彼女は「羽」のように空虚で、「トンネル」という、個々の物体の区別も自己と非自己の区別もつかず、方向もわからない闇の中へ漂い落ちていくのである。Federn, P. (1953) は「自我境界の機能が減弱しているのか、自我の統一機能が減弱しているのかの区別は大切である」と述べたが、ロウダは自我境界の機能が減弱しているだけではなく、より大きな問題につながる自我の統一機能が減弱していると思われる。

第二に、身体意識的側面の離人症状がロウダには見られる。それに関連する部分を次に引用し、要約する。

鏡を見て、他の女性と自分とを比較した後、ロウダは「私は幾度となく無の中に落ち込んでいく。……堅いドアを手でばんと叩いて、私自身を肉体のもとに呼び戻さなければ。」と思ったり、園遊会で恥をかいたことを回想して、「手を伸ばして、何か固いものに触れることができなければ、果てしない廻廊をい

つまでも吹き流されていくでしょう。では、何が掴まえられて？　どんな煉瓦を、どんな石を掴まえ、大きな深淵をのりこえて、無事に自分を肉体に引き戻すことができて？」と考える。(Woolf, V. 1931)

これらの自己を肉体に引き戻す、という表現は、v. Gebsattel, V. E. (1937) が離人症状を論じた際に紹介した症例の女性のことばに近いものがある。その症例の女性は、その非常な内省力と自己表現能力で、自分の内面に生じている事柄を細部にわたって生き生きと語ったという。彼女は「自分があると感じるためには自分を自分の中に、自分のからだの中に押しこんでやらなくてはならない」、「からだもわざわざ手に入れなければならない……もう一度からだの中に入りこみ、からだに打ちこまなければなりません」と述べた(v. Gebsattel, V. E. 1937)。ロウダの体験は、その身体意識的側面の離人症状と同様のものと思われる。

第三に、時間体験の障害である。ロウダは会食のためにレストランにでかけるが、目立たないようにしながら、以下のように思う。

ひとつの瞬間が別の瞬間につながらない。ドアが開いて、虎が跳びかかる。……あなたがた全員が恐い。跳びかかってくる感覚の衝撃 (the shock of the sensation) が恐い、あなたがたのようにそれを扱えないから――瞬間を次の瞬間に合流させることができないから。私にとってそれらは、すべて激しく、すべてばらばらのもの (all violent, all separate)。そしてもし私が瞬間に跳びかかられた衝撃で落ちたなら、あたながたは私に近づいて、ばらばらに引き裂く (tearing me to pieces) ことでしょう 。私には目的がない。それらが、あなたがたが人生と呼ぶ、全体的で不可分な集積 (whole and indivisible mass) を形作るまで、自然な力でそれに決着をつけて、分から分、時間から時間をどう流すのか、私にはわからない。(Woolf, V. 1931) 〈私訳〉

このようにロウダにとっては時間は非連続的である。ではそもそも時間を連続的と感じる条件とは何だろうか。

木村 (1978) は「時間が連続して流れているという体験が成立しうるためには……距たりをおいた二つの時点が体験されていなくてはならない。そして、その根底には、この二点における自分が同一の自分であるという前提がなくてはならないだろう」と述べる。換言すると、時間の連続性は自己の連続性、昨日の自分、今日の自分、明日の自分が同一であること、すなわち同一性 (identity) があってこそ実感できるものなのである。先にロウダの自己喪失感は「自我の解体の主観的体験」であると述べたが、これはつまり同一性の問題でもあり、ここでも自我統一機能の減弱が時間を非連続に感じさせる要因と推察される。

最後に、深淵と墜落のイメージである。ロウダは「一人ぼっちで、私は幾度となく無の中に落ち込んでいく (I often fall down into nothingness.)」、「夜、寝台が宙に浮いて漂うとき……私は

独り薄いシーツを突き抜けて、炎の深淵（gulfs of fire）に落ちていく」、「いまの私の無限の深淵（the infinite depth）との間は、ほんの薄い紙一重」（Woolf, V. 1931）といった表現をする。また、Virginiaの日記にも以下のような記述がある。

どうして人生はこんなに悲劇的なのだろう。深淵の上にわたされた舗道の一すじのようなものだ（like a little strip of pavement over an abyss）。下をのぞくと目がくらくらする。どうやって終わりまで歩いて行けるか全くわからない。（AWD; 25 Oct. 1920）

v. Gebsattel, V. E.（1937）が紹介した離人症例の女性の固定的なイメージのひとつは深淵のイメージで、患者はその中におり、深淵の中にいるというあり方は、さまざまの激しさの墜落という形をとっていた。その症例の場合、深淵のイメージは基本的に「空虚」の象徴であったが、それは同時に「冷たさ」、「暗闇」、「絶望」、「絶対的な孤独」、「他の人たち、最愛の人たちから手の届かない遠くへ離れてしまうこと」でもあった。「彼女の言葉によれば、この深淵は彼女と世界との間にも、彼女と他の人々とのあいだにも、それどころか物と物とのあいだにもあるのだという。……世界内部のいろいろな事物相互間の結びつきや関係が失われている有様も、『深淵』という表現で語られているのである。（v. Gebsattel, V. E. 1937）」

(2) 知覚変容発作

離人症状と思われるロウダの内的独白や状態を紹介してきたが、それ以外のロウダの‘terror’として「知覚変容発作（山口、中井 1988）」があげられる。

「知覚変容発作」とは、「主に分裂病の回復の過程あるいは慢性状態における挿間的例外状態」であり、主たる体験が知覚変容であること、つまり「対象が歪んだり、大きくなったり、小さくなったり、黒白のコントラストがはっきりする。キズや木目……普段は注意の向かないものが際立って見えてくる体験、など」であることを特徴のひとつとする（山口、中井 1988）。ロウダには「何もかも柔らかで、しなっている……壁や戸棚は白く霞み、黄色い四角ばった姿をしなわせ、その上に透明な鏡が光っている」、「戸棚のかど。あれは子供部屋の姿見。二つながら、伸び、ひろがる」（Woolf, V. 1931）などの視覚の変容感がある。Virginiaも日記の中で、この知覚変容発作とおぼしき体験を記述している。それは「大きさの割合の変化」という題をつけられた一文で、「景色の大きさの割合がとつぜん変る……丘が高くせりあがり、そのまわりの山々も高くなった……女の人たちの服の色もほとんど色のない周囲の中で大へんあざやかに、純粋に見えた。私はまた、ものの大きさの割合が異常であることもわかっていた（AWD; RODMELL 1926）」というものである。

山口ら（1988）は、患者がこの知覚変容発作を「自己違和的、例外的なものと捉えて、これに対する治療を求め、また自己治癒努力を試みる」こと、短時間であることも特徴であるという。そして「普段注意の向かないものが際立って見える体験……などは、徴候的な体験と一応は言うことができる」とし、「きわめて捉えがたいながら強烈な現前性の迫力を持ち、他極から自極へ向かって迫る何ものかを体験すること……これは、『そのもの』の現前が迫ってくる『もの自体体験』、サルトルのいう『嘔吐』体験に近いものではなかろうか」という（山口、中井 1988）。先に述べたように非定型精神病の症状は多様であり、おそらくは Virginia 自身の病ゆえの体験がロウダに現れる状態の源泉なのではなかろうか。

以上、Virginia の作品について、病のために彼女が経験したと思われる症状や状態像の内的独白を考察してきた。最後に藤縄（1981）による非定型精神病の症状についての論考に鑑み、それらの症状等を整理することを試みる。

3．病と作品世界について

これまでに Virginia の小説を 3 作品とりあげ、その世界に現れる登場人物たちのさまざまな体験を、Virginia 本人とも関連させながら考察した。彼女の病の診断について、それを非定型精神病と見なした神谷（1981）の見解を紹介しておいたが、ここで作品中に現れる登場人物の主観的記述を、非定型精神病を「意識野の構造解体（Ey, H. 1963）」という視点で捉える考え方に基づき、少しだけ整理してみる。

藤縄（1981）は「急性ないし亜急性に人格（むしろ意識野）の解体をきたし、可逆的な位相経過をたどる急性精神病としての非定型精神病は、その諸症状を階層的に整理することで少しでも明らかにすることができる」と述べた。その階層を図式化したものが図 1 で、これは Ey, H.（1963）による、急激な精神構造の解体を「意識野の構造解体」としてとらえ、精神疾患を「意識の病理」と「人格の病理」とに分ける考え方に基づき順列づけられたものである。前者の「意識の病理」とは、そのときその場での意識と関連し、急性精神病をモデルとする。後者の「人格の病理」とは、時間性・連続性のあるひとつのまとまりとしての人格の病理であり、モデルは慢性精神病および慢性神経症である。そして藤縄（1981）は「非定型精神病の諸症状は意識の病理の系列のもとで把握される」という。Ey, H.（1963）による「意識野の構造解体」を、意識野の構造の上部の水準から最も低い水準へと障害される階層的順列としてみると、躁うつ状態、離人体験、幻覚－妄想体験、もうろう－夢幻様状態、錯乱－夢幻状態、睡眠と夢、となることから、図 1 のごとくの階層を示したのである。

さて、藤縄（1981）は「症状は解体の速度とその程度（深さ）によって、かなり多形的な病像

A．躁うつ的気分変調
↓ ↑
B．離人症体験
↓ ↑
C．急性幻覚妄想状態
↓ ↑
D．緊張病様症状群
↓ ↑
E．夢幻様状態
↓ ↑
F．錯乱状態

図１　非定型精神病の症状階層（藤縄 1981）

を示すことがある」と述べたが、Virginiaの登場人物に現われる、またVirginia自身の症状も多様である。*The Voyage Out*の主人公にはエピソード的離人症状と急性幻覚妄想状態、緊張病様の昏迷があり、『ダロウェイ夫人』の登場人物セプティマスには抑うつ気分、離人症状、急性幻覚妄想状態および夢幻様状態が、また『波』の登場人物のひとりロウダには離人症状、知覚変容発作があった。藤縄（1981）の図１の項目中、あてはまるものは「A．躁うつ的気分変調」、「B．離人症体験」、「C．急性幻覚妄想状態」、「D．緊張病様症状群」、「E．夢幻様状態」である。これらの藤縄（1981）による階層に、登場人物あるいはVirginiaという個人の症状の階層であるがゆえに現われる中間段階として、エピソード的離人症状と知覚変容発作を加えて、整理してみよう。比較的短時間のうちに可逆的であったエピソード的離人症状は「B．離人症体験」の上層に置く。知覚変容発作のほうは、空間が徴候性を持つ一歩手前とでもいうべきものであり、離人症状が「徴候空間突出と全面化……を却下する働きを持つ（中井、山口、安 1989）」ことから「B．離人症体験」の下層に、また知覚変容発作が自己違和的であるのに対し、幻覚妄想状態は多くの場合自己親和的と言えるため、「C．急性幻覚妄想状態」の上層に、つまり「B．離人症体験」と「C．急性幻覚妄想状態」の間に加えて整理すると、図２のようになる。ただし、上記藤縄（1981）の図１の項目中、「F．錯乱状態」だけは該当するものがない。これはVirginiaにそこまで意識野の構造解体をきたすことがなかったためと推測することもできるが、それよりもむしろ、錯乱状態が「構造解体の『底』にあるもので、この障害の臨床的極期にあっては『意識していない』という陰性症状が前景に現われる（Ey, H. 1963）」ためではあるまいか。たとえば錯乱患者における錯乱夢幻症ではその「体験」は「夢のような体験であり、把持さえされえないか、把持されにくいものであり、また再び生きられないか、再び生きることが困難な体験なのである（錯乱体験に対する健忘はここから生ずる）（Ey, H. 1963）」。つまり創作活動を行える状態にあるときのVirginiaにとって錯乱状態は、意識的に想起し言語化して作品中に描写することの非常に困難な、あるいは不可能なものであったと考えられるのである。

抑うつ気分：セプティマス
↓ ↑
エピソード的離人症状：Rachel
↓ ↑
離人症体験：セプティマス、ロウダ
↓ ↑
知覚変容発作：ロウダ
↓ ↑
急性幻覚妄想状態：Rachel、セプティマス
↓ ↑
緊張病様の昏迷：Rachel
↓ ↑
夢幻様状態：セプティマス
↓ ↑
（錯乱状態）：該当なし

図２　登場人物の症状階層

以上のように、藤縄（1981）の非定型精神病の

症状階層の考え方に従って、作品における登場人物たちの独白や描写から読み取れる諸症状を整理してみると、そこにはVirginia自身の非定型精神病による意識野の解体の様相が現れているといえるのではないだろうか。

ところで、Virginiaの病の主観的体験の一部が作品群にのせて語られていることは、先述のような階層が構成できることからも示唆されるし、また神谷（1981）がつとに指摘していたことでもあった。ここで疑問として浮びあがることのひとつに、Virginiaがなぜ、これらの内的体験の「語り」を作品におりまぜたのだろうか、ということがある。たとえば『波』の売り上げが初期には非常に良かったことについて、Virginiaは日記の中で「あのわけのわからない本（this unintelligible book）は、今までのどの本よりも『受けて』いる（better "received"）。……そしてよく売れること――あんなむずかしい、骨の折れる（grinding）ものを人びとが読めるなんて、なんと奇妙なことだろう！（AWD；9 Oct. 1931）」と述べ、作品が理解されることについては決して楽観してはいなかったことがうかがえる。ただしこれはかなり大きな問題でもあり、本稿の目的の範囲を超えるものであるためここでは触れないが、今後検討される余地が残されていそうである。

注

(1) 以下'Virginia'で統一するが、引用文献の中の片仮名表記「ヴァージニア」や「ウルフ」はそのまま引用する。

(2) 非定型精神病とは「躁鬱病と同様に周期的または発作的に一定の（主として分裂病的な）精神症状群がくり返して現われる予後のよい一群の内因性精神病」である（村上 1952）。その諸症状は、藤縄（1981）のまとめによると、不安、焦躁、躁－うつ的気分変動、疎隔体験・離人症状、恍惚体験、夢幻様状態、緊張病様状態・興奮と昏迷、錯乱状態などがあげられる。非定型精神病という診断は、最近の精神医学において用いられることの多い操作的診断基準（DSM-Ⅳ-TR）あるいはWHOのICD-10分類では、相当する範疇はあっても名称が異なったり、他の範疇に含められたりしており、積極的には診断名として用いられない傾向もある。

(3) 精神分裂病は統合失調症という名称に改められていく動向にあるが、本稿においては引用文献との整合性を考慮し、精神分裂病または分裂病という名称を用いる。

(4) 以下〈　〉は筆者による付記を表わす。

(5) 日記からの引用箇所について：1953年に刊行されたWoolf, L.による編集のVirginiaの日記の抄録版『ある作家の日記（*A Writer's Diary*）』からの引用部分は、本稿においては'AWD'と略号だけを示し、日付け等を付す。

(6) 1930年10月16日、Ethel Smith宛。

引用文献

Bell, Q. 1972　黒沢茂（訳）1976　ヴァージニア・ウルフ伝１　みすず書房（*Virginia Woolf : A Biography, Volume One Virginia Stephen 1882 - 1912*. London : The Hogarth Press.）

―― 1972　黒沢茂（訳）1977　ヴァージニア・ウルフ伝２　みすず書房（*Virginia Woolf : A Biography, Volume Two Mrs Woolf 1912 - 1941*. London : The Hogarth Press.）

Ey, H. 1963　大橋博司（訳）1969　意識Ｉ　みすず書房（*La conscience*. Paris : Presses universitaires de France.）

Federn, P. 1953 Weiss, E.（Ed.）*Ego Psychology and the Psychoses*. London : Imago Publishing.

藤縄昭　1981　症状　諏訪望・西園昌久・鳩谷龍（編）　現代精神医学大系第12巻《境界例，非定型精神病》中山書店 pp. 185 - 205

Gebsattel, V. E. v. 1937　離人症問題によせて――メランコリー理論への一寄与　木村敏・高橋潔（訳）1984　岩波講座精神の科学別巻　諸外国の研究状況と展望　岩波書店（Zur Frange der Depersonalisation. Ein Beitrag zur Theorie der Melancholie. *Nervenarzt*, 10, 169 - 178, 248 - 257.）

神谷美恵子　1981　ヴァジニア・ウルフ研究　みすず書房

木村敏　1978　自覚の精神病理　紀伊国屋書店

村上仁　1952　異常心理学　改訂版　岩波書店

中井久夫　1974　分裂病の発病過程とその転導　木村敏（編）分裂病の精神病理３　東京大学出版会 pp. 1 -60

――　1975　サリヴァンの分裂病論　1985　中井久夫著作集　精神医学の経験２巻　治療　岩崎学術出版社　pp. 338 - 358〔初出：1975 現代思想　9〕

中井久夫・山口直彦・安克昌　1989　分裂病の経過と離人症状　山口直彦（編）1991　中井久夫共著論文集　精神医学の臨床　岩崎学術出版社　pp. 91 - 125〔初出：1989　精神科治療学 4 (11)〕

Spater, G. & Parsons, I. 1977 *A Marriage of True Minds: An Intimate Portrait of Leonard and Virginia Woolf*. London : Jonathan Cape and The Hogarth Press.

Woolf, V. 1915 *The Voyage Out*. London : The Hogarth Press.

―― 1925　丹治愛（訳）1998　ダロウェイ夫人　集英社（*Mrs. Dalloway*. London : The Hogarth Press.）

―― 1931　川本静子（訳）1976　波　みすず書房（*The Waves*. London : The Hogarth Press.）

―― 1953 Woolf, L.（Ed.）　神谷美恵子（訳）1976　ある作家の日記　みすず書房（*A Writer's Diary*. London: The Hogarth Press.）

―― 1976 Schulkind, J.（Ed.）出淵敬子・他（訳）1983　ヴァージニア・ウルフ　存在の瞬間　回想記　みすず書房（*Virginia Woolf Moments of Being : Unpublished Autobiographical Writings*. Sussex: The University Press.）

―― 1989 Banks, J. T.（Ed.）*Congenial Spirits : The Selected Letters of Virginia Woolf*. New York : Harcourt Brace Jovanovich.

山口直彦・中井久夫　1988　分裂病における知覚変容発作と恐怖発作　吉松和哉（編）分裂病の精神病理と治療１　星和書店　pp. 29 - 55